

京都府立医科大学雑誌の歩み

京都府立医科大学第一生理学教室

森 本 武 利

京都府医学振興会

奥 村 美 都 子, 上 野 賴 昭

1. はじめに

京都府立医科大学雑誌は、平成3年（1991年）に第100巻を刊行することが出来た。本学の創立以来119年、大学雑誌の発行には大学の変遷と時代を反映し、それぞれの時代において、多くの先人の並々ならぬ尽力が伺える。第100巻の刊行を機会に、現在までに得られた資料を中心に、京都府立医科大学雑誌に至る道筋とこれを支えた人達について、記録をとどめたい。

京都府立医科大学雑誌の第100巻第1号は通巻787号であるが、この第1号は明治30年（1897年）1月発行の京都府医学校校友会雑誌である。しかし、本学の創設期には、療病院雑誌他の多くの刊行物がある。これらの中、本学図書館に保存されているものをひもといて見ると、本学の創設に当った先人達の熱気が伝わってくる。その後療病院内に京都医学会が発足し、京都医学雑誌により京都の医学をリードした時代がある。京都療病院医学校は、明治14年（1881年）に京都府医学校になり、明治29年（1896年）には京都府医学校校友会が発足し、京都府医学校校友会雑誌を発行している。明治34年（1901年）に京都府立医学校、明治36年（1903年）に京都府立医学専門学校となり、大正10年（1921年）には京都府立医科大学となって、京都府立医科大学雑誌の時代になる。ここでは京都府立医学校までの時期（1872～1901年）、京都府立医学校から京都府立医学専門学校の時期（1901～1921年）およびそれ以降の3つの時期に分けて、京都府立医科大学雑誌の歩みを概観してみたい。

2. 京都療病院時代

明石博高らの努力により、京都の佛教界を中心となって療病院の為の資金が集められ、ライプチヒ大学教授会によって選ばれた Junker von Langeegg が京都に着任したのが明治5年（1872年）9月7日であり、11月1日より栗田口の青蓮院に京都療病院が開かれたことは周知のことである。この11月にはすでに療病院新聞（図1）が刊行され、一般医家の資料及び参考に供したとの記録があるが、これは明治6年（1873年）10月、4号まで確認出来ている。明治6年（1873年）4月からは療病院日講録（Junker の解剖学講義を渡忠純、真島利民、新宮涼介が筆記したもの、永松東海担任としたものもある¹⁾）が刊行されているが、これも明治7年（1874年）5月に廃刊になっている（図1）。明治8年2月には日講付録として解剖捷覧（手引書）（図1）が京都療病院記聞掛より出版されている。また明治7年（1874年）11月には、Junker の処方並びに治療に関する諸説を通弁山田文友が口述し、これを原元良が筆記した京都療病院治療則がある。

明治6年（1873年）12月には半井澄が庶務取締兼通弁として任に付き、Junker の通訳をすると共に、着任直後の明治7年1月には京都医事会社（医学会に相当）を開設している。彼は明治19年6月に退任するまでの間、神戸文哉、萩原三圭、猪子止才之助等の人材を集め、療病院初代院長、院長兼医学校校長として、療病院の育成とその運営に多大な貢献をしている。また医師会の設立とその指導に当り、療病院及び

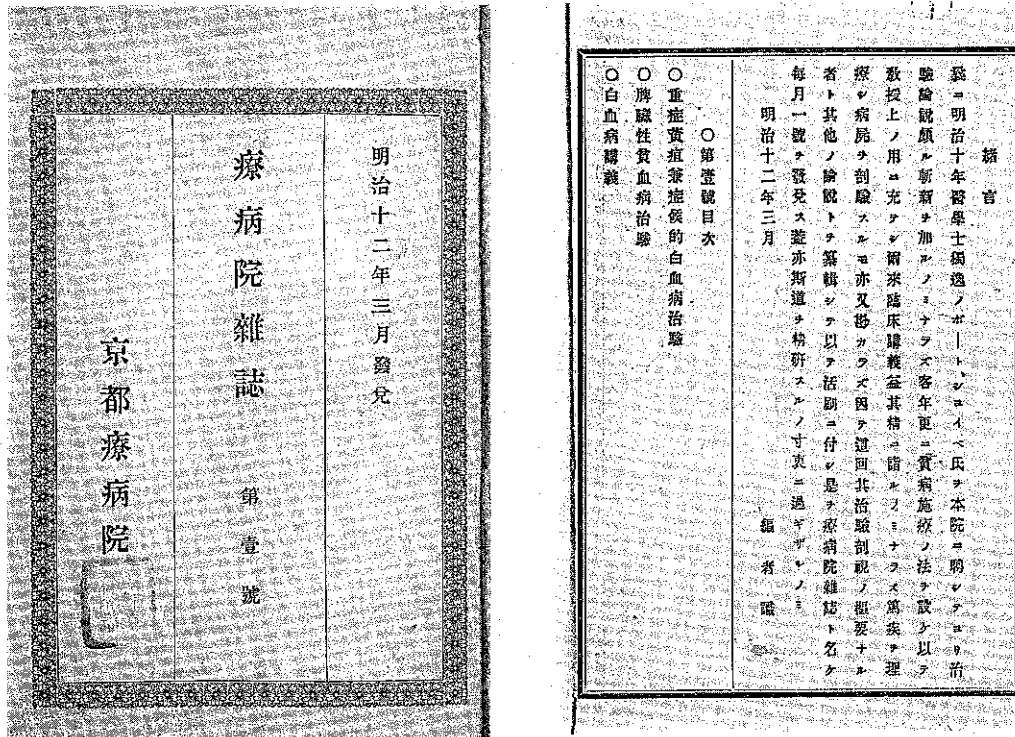


図2. 療病院雑誌
表紙と緒言およびその中に見られる熱度表

の他に、漸進悪性貧血講義（2号）等に始まり、西南戦争の帰還兵の中からコレラが発症し、これが流行すると、虎列刺病論（5号）やワイル虎列刺会議の紹介（7号）を行い、剖検によって空腸に線虫を認め（8号）、世界で最初のマンソン孤虫の報告（17号）、住血状虫、フィラリア（23号）等の報告をしている。また後に Scheube の脚気に関する著書のもととなつたと考えられる報告（11, 12, 13, 18, 20, 22, 23号）が多く見られる。なお入院患者年表や脚気

の詳細な統計、剖検所見の他に病歴の中には非常に詳細な“熱度表”や検尿表が加えられている点、先にも述べたが興味のある点である（図2）。

淮南詩存⁴⁾によると、Scheube は帰国の途上、中国及び南方諸国を旅行し、特に熱帯の地方病を研究、帰国後この研究により学位を受けた。母校のライプチヒ大学内科の講師となつたが、その後シグライツ公領の区医医事報告係を勤めながら、開業したとある。

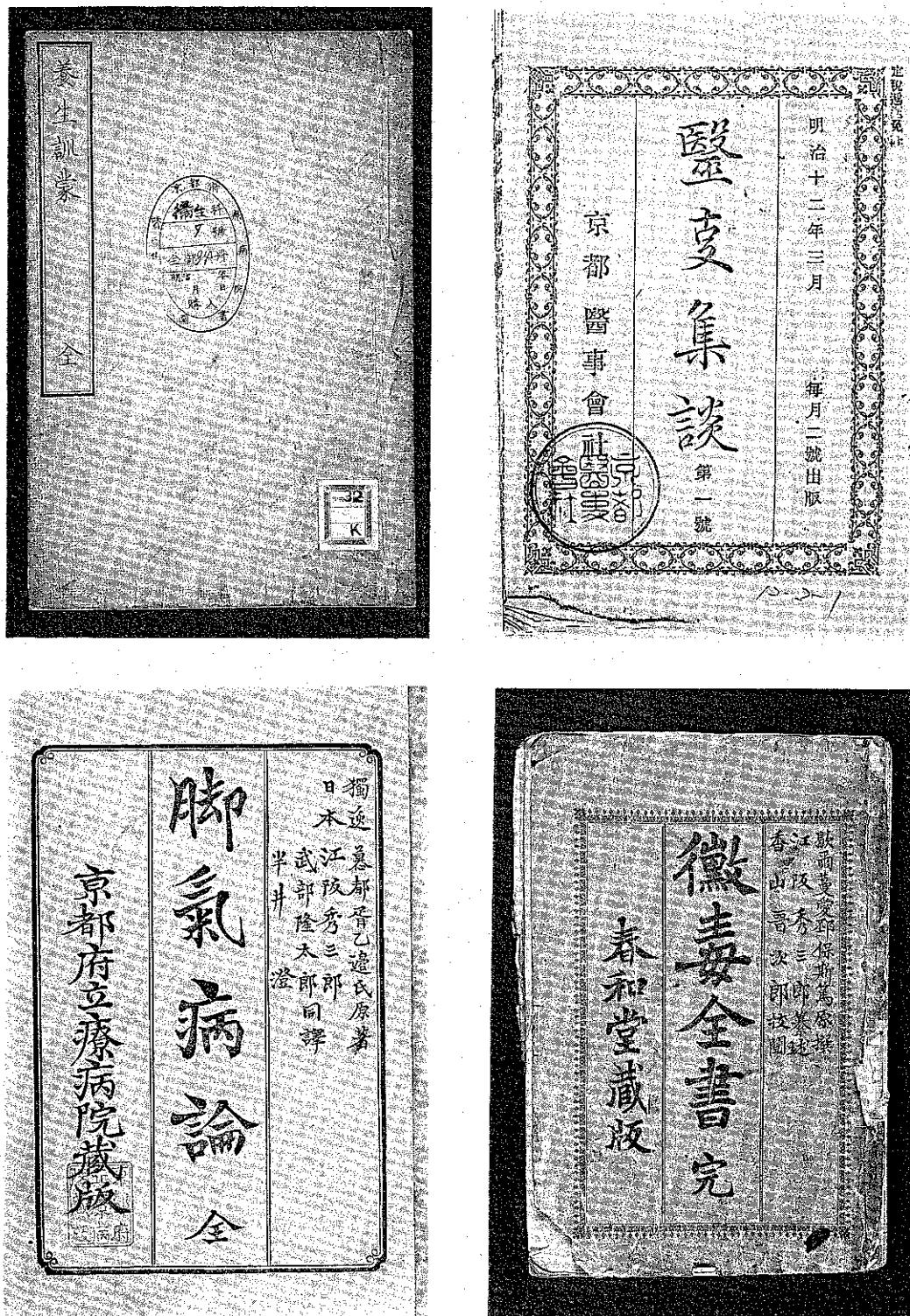


図3. 療病院初期の出版物(2)
養生訓蒙、医事集談、脚氣病論、微毒全書

Scheube の業績として主なものは、日本の風土病としての脚気に関する成果を Die Japanische Kak-ke (Beriberi), 1882, Druck von J. B. Hirschfeld, Leipzig, Die Beriberi Krankheiten, 1894, Verlag von Gustav Fischer, Jena として、また寄生虫に関する研究を Die Filaria-Krankheit, 1883, Die Krankheiten der warmen Länder, 1896, Verlag von Gustav Fischer, Jena として発表、その他に Die venenischen Krankheiten in den warmen Ländern, 1902, Verlag von Johann Ambrosius Barth, Leipzig がある。

明治17年（1884年）には江阪秀三郎、武部隆太郎、半井澄らにより Die Japanische Kak-ke が脚気病論（図3）として翻訳出版され、さらに明治30年（1898年）には Die Beriberi Krankheiten が帝国大学学生、賀屋隆吉により脚気論として翻訳出版されている。その他アイヌや日本医学史の報告があり、北海道大学第二解剖学教室、児玉教授のもとには、Scheube が明治13年（1880年）にオシヤマンベを訪れた記録が残されているとのことである。また、最近、鯖田によって、Scheube の日本人の栄養に関する論文、Die Nahrung der Japaner, Archiv für Hygiene 1:352-383, 1883 が紹介されている⁵⁾。Scheube の脚気病論は、疾病統計や病理解剖所見等、非常に詳細な解析が行われている。一方同時に日本人の食事が米食偏重であることに気付いていたが、これが脚気の治療には結び付かなかった訳である。

この療病院雑誌の創刊と時期を同じくして、京都医事会社から医事集談（月刊）が創刊され（図3）、明治12年（1879年）3月から13年9月の第20号まで発行されている。この時期、Scheube を迎えての京都の医学界の盛り上がりが察せられる。

一方、明治12年（1879年）4月には Mansvelt のつくった学制ではなかなか卒業生の出ないことから、これに一部変更を加え、療病院内に医学予備校と修業年限4か年の医学校を設け、同年5月に萩原三圭が初代の校長となっている。9月には京都府立医科大学の現在地に京都療病



図4. 神戸文哉（1848-1899）
療病院編輯係兼教授

院医学校の校舎が竣工して栗田口より移転し、また療病院は翌年の明治13年（1880年）に本建築が完成し、7月18日に開業式が行われている。しかし一方では経済的な問題が起きてきた。

療病院新聞の創刊号には

本院慈惠ノ趣旨ニ起コリ 専ラ貧民ヲ施療セントスルモ 政府訓諭アリテ無限ノ貧民ヲ救療スルニ有限ノ資ヲ以テスルハ 早晚断絶ヲ見ルニアリ ヨッテ汎ク療病ヲ貴族へ施シソノ料ヲ得テ資金ノ利殖ヲ以テ貧民施療ノ用ニ充ツルコトス

とあるように、当初療病院の運営は府民の寄付と治療費による独立採算が可能であったが、建築費に次ぐ医学校の費用の問題が、明治12年（1879年）に始まった府会で問題となつた。この論議は次第に予科の外人教師 Rudolf Lehmann の給料にも及んだ。更に明治14年（1881年）に槙村正直が京都府知事を止めて東京に移り、北垣国道が知事になると共に、従来の槙村正直一明石博明ラインによる欧風化路線が見直され、医学教育を日本語で行うこととなつた。明治14年（1881年）の9月には神戸文哉が大阪医学校

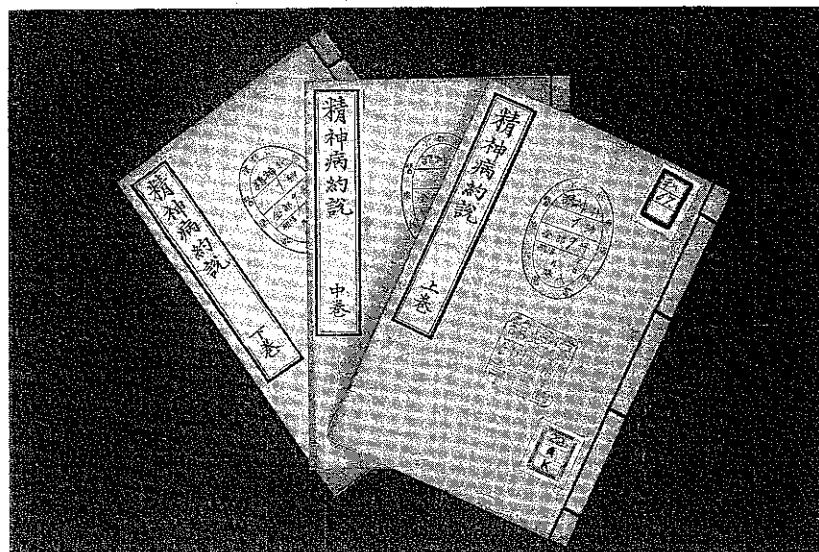


図5. 精神病訳説（わが国最初の西洋精神医学の訳書）

へ去り、また萩原三圭が東京へ去っている。そして同年12月には Scheubé が解雇された。これと平行して明治14年（1881年）5月には新宮涼亭が、また明治15年（1882年）には猪子止戈之助と斎藤仙也（東大明治15年卒）が一等教諭として着任して、本学歴史の第2ページへと歩みを進めていく訳である。

明治初期の出版物に關し、小野寺は長三州編輯の“新聞雑誌”という雑誌があることから、新聞と雑誌の區別がなかったとしている⁶⁾。すると日本の医学雑誌で最も古いとされている文園雑誌（明治6年（1873年）6月）よりも明治5年（1872年）11月に発行された京都療病院新聞の方が古いことになる。

これはさておき、療病院時代を通じてその維持發展にとって、半井澄と神戸文哉の貢献は測り知れないものがある。ところが京都府立医科大学80年史及び100年史のいずれにも神戸文哉の履歴及び消息が記されていない。半井澄、萩原三圭らについては、京都の医学史²⁾、京都府立医科大学80年史⁷⁾及び京都府立医科大学100年史⁸⁾等に詳細な報告があるので、これに譲るとして、今回神戸文哉に関して文献を涉獵した結果、すでに引用した平沢一の論文³⁾の他、2編の文献を得ることが出来た。またその後平

沢一氏より、神戸文哉の写真および神戸氏に関する項を含んだ著書⁹⁾の寄贈を受けたのでその一部を紹介して記録に止めたい。

まず精神医学事典によると神戸文哉（かんべぶんさい、1848—1899）（図4）は日本最初の西洋精神医学書（図5）の翻訳者として紹介されている¹⁰⁾。平沢の調査によると文哉は嘉永元年（1848年）8月12日小諸藩に生まれ、安政6年（1859年）6月12歳で江戸に遊学、野呂俊臣から和漢学を習った。元治元年（1864年）17歳より杉田玄瑞に付き医学予科を学び、慶應元年（1865年）より3年間、開成学校において英学を修めた。明治2年（1869年）9月より大阪医学校に入り、初め A. Baudin 後に Ermerins に従い医学を学んだ。明治4年（1871年）5月に大学東校に転学し、Doenitz, Muller, Hoffmann らに従い医学を修め、かねてドイツ語を学んだ。その間文部省十三等出仕を命じられ、少年生あるいは変則生の教育に当ったが、明治8年（1875年）2月に京都府療病院管学事を拝命し、また教授として、図書及び雑誌の編纂に当った。明治14年（1881年）1月には、京都府衛生課長心得兼療病院副長心得となり、同年4月大阪医学校長吉田顕三に招かれ、大阪医学校副長心得兼教授となった。大阪医学校時代には、生

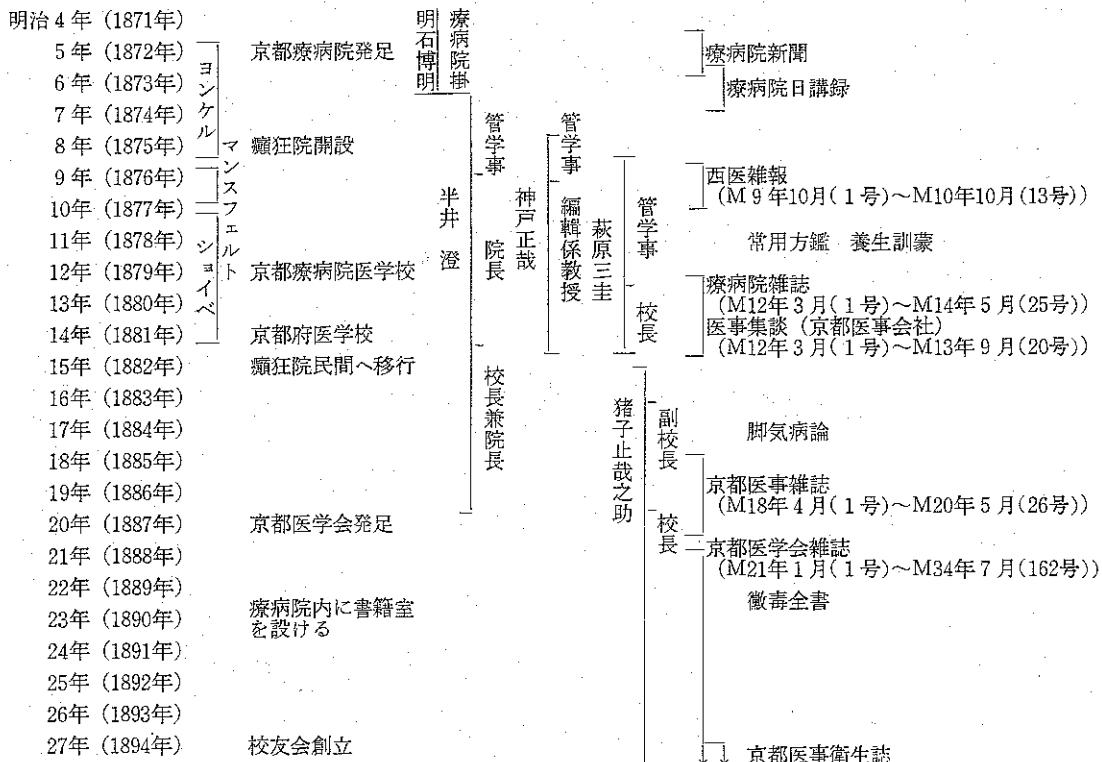


図6. 療病院の教員と出版物(年表)

理学を専門に担任したことがあるという。明治22年(1889年)3月に吉田が校長を辞職すると7月まで校長代理を勤めている。8月には大阪医学校を辞任し、大阪市東区瓦町1丁目1番地にて開業した。開業時代、医業は盛大で、明治26年(1893年)の大坂医海二十傑では内科の1位に入る程であったが、元来無欲で生涯借家で済ませ、書生の面倒を見、困窮の患者には施しをし、妻きぬ(半井澄の養女)とともにキリスト教会の孤児施設の援助をしたりして、月末にはしばしば勝手元が不如意であり、明治32年(1899年)7月21日に亡くなった時には、殆ど財産は無かったとのことである。なおお文哉の墓は大阪市南区高津中寺町、顯孝庵にある¹¹⁾。

療病院時代、翻訳者等として名前がでてくる人物に、江阪秀三郎がある。彼については淮南詩存¹²⁾および藤田による紹介¹³⁾があるので詳細はこれに譲るが、彼は嘉永7年(1854年)11月11日に滋賀県高島郡見栄ノ里で出生、明治5年(1872年)に京都に出て半井澄の塾に入った。翌

年には京都府療病院に入學し、明治13年(1880年)7月京都療病院の新築開業式に引き続いで行われた、最初の療病院卒業式にて卒業証書を得た一人である。学生時代から Scheube 第一の弟子として、多くの訳書をものにしたことになる。明治14年(1881年)には療病院付屬駆黴院の医員となり、17年(1884年)には療病院助手から京都府医学校二等教諭の辞令を受け皮膚科、梅毒病学の講義を担当している。18年には駆黴院の院長になり、明治22年6月には微毒全書(図3)を編纂している。明治26年(1893年)滋賀県高島病院が設立されたが、この際請われてその院長として高島に戻り、明治42年(1909年)4月22日にこの地で没している。

江阪は明治18年(1885年)4月に、京都医事雑誌の発行にあたっている。その緒言で江阪は医事会社より発行してきた医事集談の跡を次いで、“斯道ノ進歩”に尽くすとしている。この雑誌は明治20年(1887年)5月の26号まで発刊され、その後京都医学会が発足し、京都医学会

雑誌へと受け継がれている。

この時期までの主な出版物を、関連する教員の在職期間とあわせて、図6に示した。なおここまで記載に付いては、すでに挙げた文献の他、1) および13) を参考にした。

3. 京都府医学校から京都府立医科大学

^

療病院雑誌が廃刊になって4年、江坂によって京都医事雑誌が発行され、これが契機にもなったのか、明治19年1月“京都療病院内ニ於テ医学会ナル者ヲ創置シ毎月二会ヲ開設シ学術ヲ討論シ実験ヲ談話”することを目的にしたが、明治21年1月第1初会において“学術ト実験トヲ問ハス会員諸君ノ論説ヲ編輯”して（同誌、1号、72頁、田中秀三）発行されたのが京都医学雑誌（図7）である。明治21年(1888年)1月29日第2回の開会式では猪子が会頭として祝辞を述べている。副会頭は浅山郁次郎（眼科学教諭、副院长）、会員は療病院の医師を中心に員開業医、学生を含み、会員総数はこの時点で105

名である。編輯委員には医学校の教諭が中心となり、その後着任した療病院教諭がこれに名前を連ねて経過しているが、22年からは江坂もこれに加わっている。明治22年（1889年）からはこの会の中に京都医会（会頭：半井澄、開業医の会）や、青年医会（学生部会）が出来、会員数は324名に上っている。その後会員数は明治26年（1893年）に391名のピークに達し、雑誌の発行部数も約400部になっている。

この雑誌は京都医学図書館の設立にも重要な役割を果たしている。すなわち明治23年（1890年）に療病院内にこの雑誌との交換誌や寄贈書を中心図書室を設けている。事実、現在本学図書館の古書の中には、江坂、猪子等多くの人からの寄贈書が残されている。また明治31年（1898年）より後述の校友会の一事業として京都医学図書館の設立募金が始まり、明治32年（1899年）に至って創設開館に至った経過を詳しく読み取ることが出来る。この京都医学図書館に関しては、寺畠の論文¹⁴⁾がある。

明治27年（1894年）4月10日には、京都医事衛生誌が発刊されている。この雑誌は京都医会及び大日本私立衛生会京都支部が中心になり、78名の会員で発足した。第1号には半井澄がその趣旨を赤痢及び痘瘡が九州四国中国を経て大阪で蔓延し、京都にも流行のきざしが認められること、また翌年に予定されている万国博覧会では100万人以上の入洛者が予定され、防疫の用意が必要であること、等を挙げている。なおこの雑誌の百号は明治35年（1902年）7月に発刊され、昭和16年（1941年）12月の573号まで発刊されている。

一方明治30年の初頭は、京都帝国大学の発足の時期でもあり、猪子は医科大学の京都への誘致に奔走している。当初は病院に関しては京都府療病院医学校を使用し、また教員には療病院の豊富な人材を当てる計画で誘致に成功した。予算は基礎医学関係を新築する五万一千円のみの予算であったが、猪子は病院をも含めて、全面的に新設する案に変更することに成功し、基礎1千坪、臨床2万坪の敷地を確保することが出来た。予算は建設調度費二十余万、学術用器

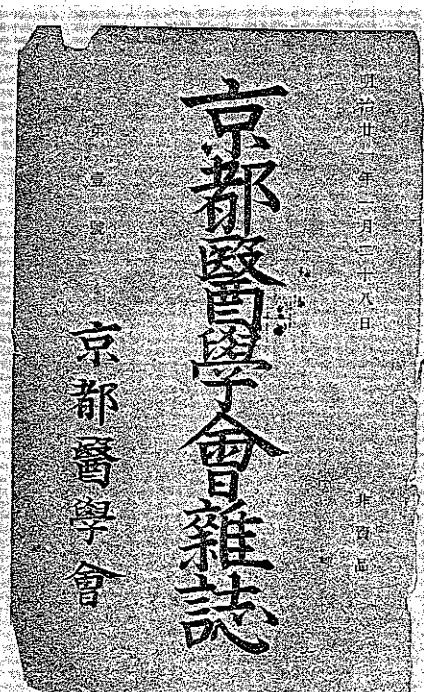


図7. 京都医学会雑誌

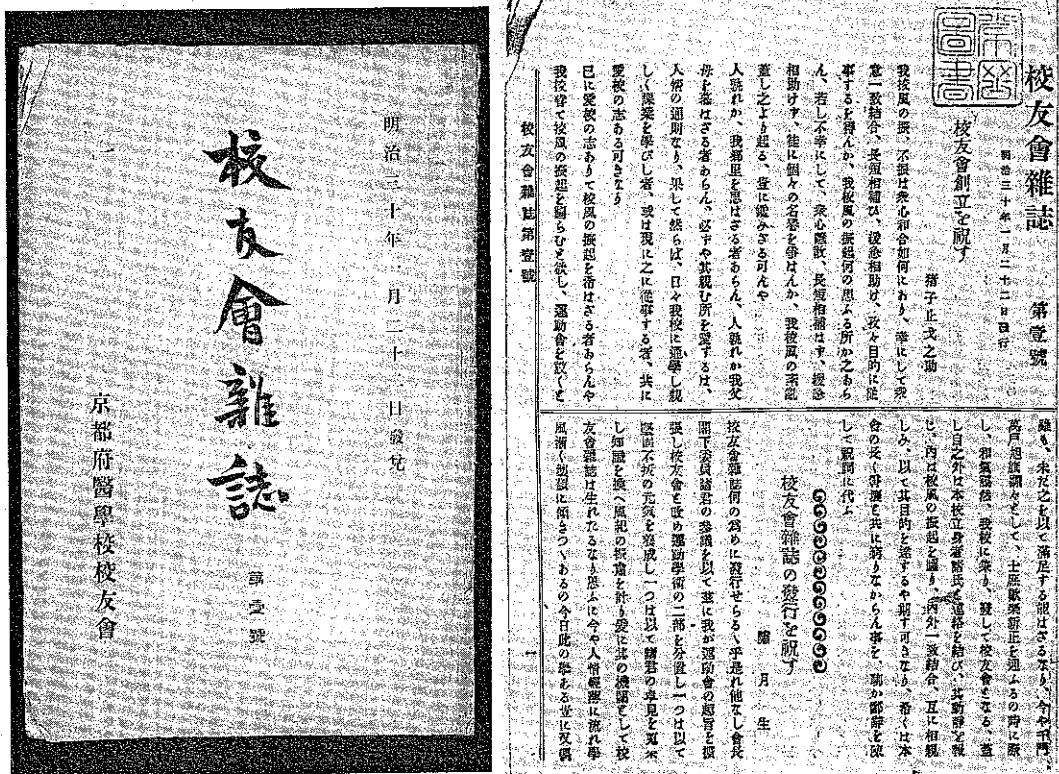


図8. 京都府立医学校校友会雑誌創刊号表紙及び第一頁

械図書等購入費二十八万、経常費二十八万円である²⁾。そして明治32年(1899年)7月には、京都帝国大学京都医科大学が発足することになる。東京大学で学び、欧州の医学を見てきた猪子にとって、狭隣な土地でしかも独立採算の元では、医学の発展は有り得ないことを熟知していたのであろう。その後京都医科大学病院長に就任した猪子は、診察時間を9時から10時30分に限っているが、これも研究の発展の為のみならず、独立採算で教諭の往診費まで含めた総予算が約十萬円の京都府療病院医学校の経営には不可欠なものであったろう。

ところで京都医学会は明治26—27年をピークとし、その後会員数が減少し始め、32年頃からは欠会や会費の滞納が目立つようになり、明治34年(1901年)7月、162号をもって廃刊となつた。この困難な時期に京都医学会雑誌の編集に当り、またこの京都医学会の残務処理をしたのは、精神科島村教諭のもとで助教諭を務め、

同年4月から教諭となった朝井元章である。彼はこの雑誌の総目録をつくり、他の書物と共に京都医学図書館に寄贈し、残余金三百円を、明治36年(1903年)に新しく発足した京都医学会へ引き渡している。

この新しく出来た京都医学会は、明治37年(1904年)4月に京都医学雑誌の第1巻第1号を刊行している。この雑誌は学術論文を主体とし、巻末には独文の抄録が掲載され、カラーの図を入れるなど、現在の学術雑誌の形態を備えている。当初は京都府医学校、京都帝国大学京都医科大学および京都医会の3者により編集されていたが、次第に京都医科大学が中心となって行った。この雑誌は昭和19年(1944年)、第40巻で廃刊になっている。なお昭和25年10月10日から、京都医学会雑誌が発行されているが、これは京都府医師会の機関誌で、今日に至っている。

さて話は明治へ戻り、療病院内に出来た京都

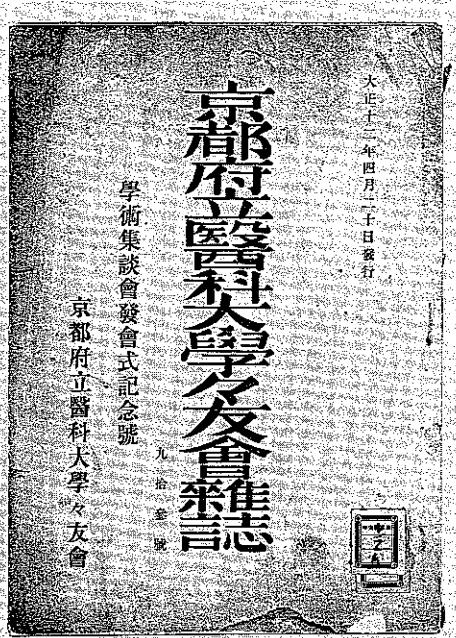


図9. 京都府立医学校校友会雑誌 93号とこの中に見られる告示

医学会の青年医会も運動が活発化し、学術部と運動部が出来た。同時に明治28年（1895年）の遷都1100年記念と時を合わせて開催される、第3回万国博覧会に向けての京都の人達の気分の亢りを反映してか、明治27年（1894年）6月25日には療病院において猪子校長の肝入りで大運動会が開催されている。そしてこれが明治29年（1896年）の校友会の結成、明治30年（1897年）の京都府立医学校校友会雑誌の創刊（図8）へと進んで行った。

京都府医学校校友会発足当時の規約を見ると、その構成は院校職員卒業生及生徒からなり、目的は相互の知識を交換し体力を練り徳義を養い以て校風を振起し同窓の和親を謀るとある。従つて内容は、論説、科学、抄録、雑録、文芸作品、および会報を含んでいる。

その後京都府医学校校友会雑誌は、大学への道のりと共に名前を変え、内容が変化していく。

その間、特徴のあるものを拾うと、まず明治41年（1908年）第48号の創立30年記念号があり、この時期の編輯者は助教諭梅原信正である。大正3年（1914年）には10か年を掛けた、校舎、

從來四月十六日ヲ本學記念日ト定メラレアリシカ、大正十年
醫科大學ニ陞格セルヲ機トシ、陞格並開校五十年記念式典ノ
舉行セラレタル十一月一日ヲ以テ爾後本學ノ記念日トナスコ
トニ定メラレタリ。此日ハ音ニ陞格ニ對スル好記念日タルノ
ニアズ、校史ヲ籍ケバ、明ナルガ知ク、明治五年栗田口青蓮
院舊栗田宮跡内ニ本府假病院ヲ創設シ、醫學教授所ヲ設立シタ
ル即チ本學發祥ノ日タルニ於テ最モ意義アルノ日ナリ。從來
襲用シ來レル四月十六日ハ、記録ニ微スルモ之ヲ記念日ト定
ヘキ根據ニ乏シ、茲ニ特記シテ、設定ノ理由ヲ明ニス。
（大正十三年三月）

療病院の改築工事が完了し、校友会雑誌の第69号が、落成記念号として発刊されている。

大正8年（1919年）には大学陞格問題が起こり、3月13日および7月13日に校友会雑誌の号外を発行し、募金活動を行い、大正10年（1921年）には第3号を発行してその経過を報告している。

大正10年（1921年）10月19日には京都府立医科大学の設立が認可され、校友会雑誌の第91号（大正11年（1922年）4月発行）は創立五十周年、陞格記念号となっている。なおこの号に、從来京都療病院医学校となった明治12年4月16日を大学記念日に定めていたのを、陞格並開校五十年記念式典の挙行された11月1日とすることに定めている（図9）。

大正12年（1923年）5月には学位授与権が承認されている。これに先だって1月に学内に学術集談會が発足し、京都府立医科大学学友会雑誌の93号（大正12年4月20日発行）は学術集談會発會式記念号である。次いで第94号（大正12年9月10日発行）から雑誌のタイトルを京都府立医科大学雑誌に改題した。この際学生を中心とした記事は京都府立医科大学学友会、学内

雑誌名		巻数	号数	発行年	西暦	発行所
和文	歐文					
校友会雑誌			1～26	明治30年～ 明治35年	1897～ 1902	京都府医学校 校友会
			27～30	明治35年～ 明治36年	1902～ 1903	京都府立医学校 校友会
			31～90	明治36年～ 大正10年	1903～ 1921	京都府立医学 専門学校校友会
			91	大正11年	1922	京都府立医科 大学校友会
			92			
			93	大正12年	1923	京都府立医科 大学学友会
学友会雑誌			94～103	大正12年～ 大正15年	1923～ 1926	京都府立医科 大学学友会
			1～40	昭和2年～ 昭和19年	1927～ 1944	
京都府立医科大学雑誌	Mitteilungen aus der Medizinischen Akademie zu Kyoto		41 (原著編)	272～277	昭和19年	1944
			41(抄録編) ～47(3号)	272～306	昭和19年～ 昭和25年	1944～ 1950
			Journal of Kyoto Prefectural Medical University	47(4号) ～75	昭和25年～ 昭和41年	1950～ 1966
京都府立医科大学雑誌	Journal of Kyoto Prefectural University of Medicine		76 ～97(3号)	307～498	昭和42年～ 昭和63年	1967～ 1988
			97(4号)～	499～753	昭和63年～	京都府医学振興 会

(注) 発行所名は原本の表記による。

京都府医学校は明治34年(1901年)9月京都府立医学校に移行。

京都府立医科大学医学会は昭和61年(1986年)3月財団法人京都府医学振興会に移行。

図10. 校友会雑誌から京都府立医科大学雑誌への変遷

付録の形で発行されることとなり、大正11年(1922年)から昭和元年(1926年)までの間に6号まで発行されている。昭和2年からは、京都府立医科大学時報と名前を変えているが、これは昭和3年3月の第4号で終っている。その後学内報および学生関連の記事は、京都府立医科大学新聞(昭和3年4月一)に、また文芸関係は双丘(昭和21年一不明)、雪まつり(昭和22)、赫土(昭和29年—昭和44年)などに受け継がれた。

京都府立医科大学雑誌第100号(大正14年6月10日発行)は第百号記念増大号として発行、昭和2年度(1927年)に入って純医学雑誌として発行し、第104号をもって第1巻第1号とした。校友会雑誌から京都府立医科大学雑誌の今日までの変遷を図10に示した。

4. 京都府立医科大学雑誌の歩み

専門学校から医科大学への昇格に功績のあった学長兼院長兼内科教授、小川嵯五郎が大正15年(1926年)8月に退職して兵庫県立神戸病院の院長に赴任したが、このときに本学に奨学資金を寄附したとある。大学ではこの資金を基に京都府立医科大学雑誌を、総説、原著、抄録、会報からなる純学術誌として発足させた。そしてこの第1巻第1号を小川前学長の退職記念号としている。

このときの編集発行人は学術研究会会长の梅原信正教授(図11)であるが、梅原教授はその後昭和18年(1943年)の定年退官までその任に当っている。その後一時大沢徹翁氏他が編集兼発行人になっているが、昭和36年(1961年)に



図11. 梅原信正教授
(編集委員長在任期間：1926～1943)



図13. 佐野 豊教授
(編集委員長在任期間：1965～1979)

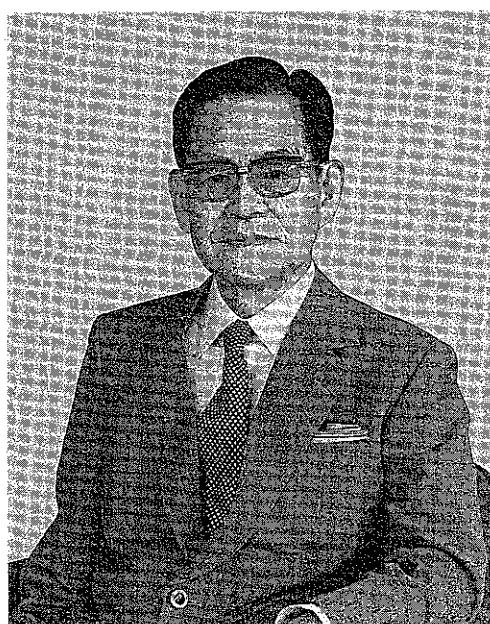


図12. 荒木正哉教授
(編集委員長在任期間：1961～1965)

病理学の荒木正哉教授（図12）が学術研究会の理事長に就任され、編集兼発行者を兼ね、その後昭和40年（1965年）から解剖学の佐野豊教授（図13）が引き継がれ、大沢徹翁氏（図14）の

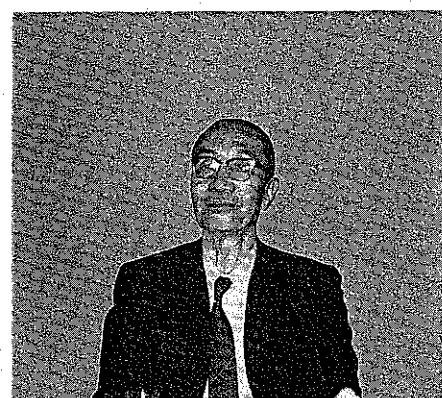


図14. 大沢徹翁氏
(1899～1984)

指導に当られた。この点に関しては、本誌第100巻9号に佐野豊前学長が紹介下さったので、それを参照頂きたい。

この京都府立医科大学雑誌は、昭和2年（1927年）から7年（1932年）までの間は1年に各1巻ずつ、昭和8年（1933年）から18年（1943年）までは昭和16年（1941年）の年2巻を除いて、それぞれ年3巻ずつ発行されている。昭和19年（1944年）に2巻に減り、終戦の年の

○ 本 誌 休 刊

昭和2年5月本誌創刊以來昭和7年11月迄月刊發行シ、翌昭和8年1月より毎月發行ニ改メ略々順調ニ現在ニ至リタリ。然ルニ近時大東亞戰爭ノ影響稍ト顯著ナルモノアリ、例ヘバ用紙配給ノ遲延、印刷所ノ能率低下、或ヘ印刷資材ノ不足等是ナリ。遂ニ本誌モ1月號組版中途ニシテ印刷進行不可能トナリ、ココニ1月號ハ休刊スルノ已ムナキニ立チ至リタリ。會員諸氏コレヲ諒トセラレントブ。

図15. 京都府立医科大学雑誌 第37巻1号の休刊通知

20年（1945年）には発行されていないが、翌昭和21年（1946年）には薄いながらも第42巻が発行されている。昭和22年（1947年）には43巻が、23年から24年に掛けて44巻が発行され、その後次第に論文が増えて29年（1954年）までは2年で3巻のペース、昭和30年（1955年）から36年（1961年）にかけては毎年2巻である。その後昭和37年（1962年）から現在の1年1巻が定着している。

この間の特徴あるものに付いて2～3紹介すると、昭和7年（1932年）第6巻はその前年11月に行われた、本学創立六十年、陞格十周年記念号である。

昭和18年（1943年）1月に発行されるべき第37巻1号は2月に発行されているが、この号には図15に示した記事がある。さらに同年11月と12月号は合併号となり、昭和19年（1944年）には3月号までは順調に発行されているが、4月

謹 告

今般日本出版會ノ指示ニ基ツキ時局ノ要請ニ應シテ本誌發行ノ形式ヲ變革スルノ止ムナキニ到リ。次ニ投稿並ニ出版ニ關スル要項ヲ略記仕候間御詫承相成度此段得貴意候。

新規定要項

1. 原著論文ト共ニ必ズ其ノ抄録ヲ提出スルコト
2. 原著論文ヘ組上リ16頁(圖表共)ヲ最大限トスレ共能フ限り壓縮スルコト
症例報告ヘ組上リ6頁(圖表共)以内トス
3. 抄録(邦文ニテ原著論文要旨ヲ簡明ニ記載セルモノ)ハ組上リ2頁以内トス
4. 原著ヲ極メテ京都府立医科大学論文集トシ、抄録ハ之ヲ別ニ極メテ京都府立医科大学雑誌トシ、共ニ毎月1回刊行ス
5. / 論文集ヘ公的研究園地ニ寄附シ、著者ニヘ別刷50部ヲ頒與ス
原著論文掲載ニ要スル費用ノ全額ニ著者ノ負擔トス
6. 京都府立医科大学雑誌ヘ從來通り一般會員ニ無料頒布ス
7. 會員ハ希望ノ原著論文別刷ヲ申出ニヨリ優先的ニ購入スルコトヲ得

昭和十九年八月二十日

京都府立医科大学雑誌研究会
會長 中 村 登

図16. 戦時下での投稿規程の変更

昭和二十三年夏、秋、四半期雑誌用紙割当通知書							No. / 282
(購入者) 宝文館		(所在地) 東京都文京区本郷六丁目 広小路					(社名) 学術研究会
新聞出版社出以用紙割当を資金に於て下記の如く用紙の割当を決定しましたので御連絡致します。							申
昭和二十三年一月一日							紙、墨及出版用紙割当審査委員会
高学年会場							
品 名	刊 型	印 数	費 款	封 度	量	備 考	合 計
雑誌会場	大字			1		印刷紙	730
雑誌	B3	1,480	1,500	730		アート紙	
						厚紙	60
							21
							730

上記の割当を受けた出版物は、丁寧に郵便局へ納本下さい。

日本がよいことは用紙の割当が保留せられます。

図17. 総理府新聞出版用紙割当通知書



図18. 京都府立医科大学雑誌 第100巻第1号表紙

号の第41巻第1号には、図16のような告示があり、第41巻は原著編と抄録編の2つに分れている。昭和19年（1944年）の10月からは出版されず、次の第42巻は昭和21年6月の発行である。そして原著編と抄録編の分離は昭和24年の第45巻まで続いている。この時期の他大学の雑誌も同様に原著編と抄録編に分れているので、図16にあるように、この変更は中央からの指示によるものであろう。また昭和19年10月から21年6月までの空白期は第二次世界大戦の末期と終戦直後の混乱と印刷用紙難を反映したものであろう。事実編集部の資料の中に、昭和22年から25年に到る用紙の割り当て通知書が残されている（図17）。

昭和54年（1979年）には大沢氏が退任し、編集委員会が結成されて、その後を引き継ぎ、昭和55年（1980年）の第89巻から表紙に変更を加えると共に、全ての論文が査読審査されることになった。また出版の為の財政基盤が不安定であったので、京都府立医科大学雑誌のみで独立採算性を探り得るよう、規約が改正された。しかし独立採算性は投稿者にとって、非常な経済的負担を強いるものである。ところがこの問題に関しても再び、明治30年代に本学を廃校から救った島村俊一先生のお蔭を被ることになった。

島村俊一先生の未亡人島村こう氏は昭和38年におなくなりになつたが、その遺言に島村俊一先生邸跡を処分し、それを京都府立医科大学精神医学教室に寄付するようにとの1項があった。これを有効に使うため、精神医学教室から大学へとの申し出があり、これを島村基金として、財団法人京都府医学振興会が発足した。この法人の発足には、当時の佐野豊学長および草木慶治事務局長（現京都府副知事）の尽力があったが、その後この財団は次第に発展し、京都府立医科大学雑誌に対する援助も可能となり、今年第100巻（図18）の発行を迎えた。

今後も京都府立医科大学雑誌はいろいろな局面を迎えることであろう。大学雑誌の時代は終ったという意見もある。しかし120年の歴史を振り返ると、京都府立医科大学雑誌はそれぞ

れの時代にそれぞれの役割を果して来ている。今後も本誌が京都府立医科大学にとって、それなりの役割を果してくれることを祈っている。

謝 辞

本文をまとめるに当り、昭和20年卒、横田穰先生、昭和28年卒、藤田俊夫先生および金沢大学名誉教授、平沢一先生には多大な示唆を頂いた。また、東京大学法学院明治新聞雑誌文庫、国会図書館、武田科学振興財団杏雨書屋、京都府立総合資料館、京都大学医学図書館、金沢大学医学図書館、同志社大学図書館並びに京都府立医科大学図書館員諸氏等のご協力に感謝いたします。

文 献

- 1) 板谷無縫（1897）京都府医学校及び療病院沿革。校友会雑誌。2, 29-31, 3, 22-24, 4, 27-34.
- 2) 京都府医師会医学史編纂室編（1980）京都の医学史・思文閣。
- 3) 平沢 一（1964）我が国最初の西洋精神医学書“精神病約説”とその訳者神戸文哉。精神医学。6, 548-555.
- 4) 深南会（1937）淮南詩存。
- 5) 鮎田豊之（1990）明治十代前半の療病院生徒、看病夫の高たん白質食—ショイペの報告から。醫述。8, 16-18.
- 6) 小野寺俊治（1957）初期の日本医学雑誌。日本医事新報。1728, 47-50.
- 7) 京都府立医科大学編（1955）京都府立医科大学八十年史。
- 8) 京都府立医科大学編（1974）京都府立医科大学百年史。
- 9) 平沢 一（1990）書物航游。新泉社。
- 10) 加藤正明他編（1975）精神医学事典。弘文堂。
- 11) 村島隆三（1985）神戸文哉とその墓。医譚。復刊54, 3367-3369.
- 12) 藤田俊夫（1990）江阪秀三郎—初期の京都府療病院と滋賀県高島病院に尽悴した明治の医人一。医譚。59, 3551-3559.
- 13) 梅原信正編（1908）我校の沿革略史。校友会雑誌。48, 1-29.
- 14) 寺畠喜湖（1990）京都医学図書館の設立について。医譚。58, 3527-3536.